

# 住の地産地建が環境を守り地域を甦らす

## 5 地域の資源と工法で建てる家は、まちの矜持を保ち人を育てる

欧州の地方都市を訪ね歩くと何処も本当に個性豊かで美しいと感じざるを得ません。その外見の美しさに驚くこともさながら町並み形成の根底に流れている、人々の矜持、哲学、意地というようなものに圧倒されるというのが正直なところ。調和のとれた町並みの背景には、もちろん地域の資材で家を造り続けているという歴史もありますが、もっと深い「どのように生きたいか」或いは「(自然や近隣等と) どのような関係の中で生きたいか」をいつも問い続ける姿勢があるのだと思います。

ドイツの村々のように、美しい村づくりのコンテストで毎年競い合っている国もあります。人口は皆1,000人足らずの所です。地域の商店もとても大切に、自動販売機などは一切ない都市も珍しくありません。物質的・精神的エネルギーの他に「環境美は第三のエネルギー」といわれます。人は、困難や悲しみに出会っても美しい夕日や自然などを目にするるとまた明日の勇気が湧くものです。ゴミだらけで無機質な空間を見ていて明日の勇気が湧くのでしょうか。ヨーロッパの町や村が美しいのは、地域計画の最上位が自然や歴史文化の継承を踏まえた景域(観)計画となっていること。道路や河川等の公共施設もこれを基本にしていること。また、建物の素材はできる限りその地域で産出する土や石や木材などを利用していること。自分の家の周囲だけでなく道路や公共広場も看板の削減や花や緑などで美しくしていること。公共交通機関をととても大切にしていること。家の修繕などできることはできる限り自分自身で行うことが基本であり、またモノを大切に使い必要以上に持たないことなどです。

源氏物語を英訳で紹介したアーサーウェリーが、戦前に日本へやってきた当時、日本の余りの美しさに驚いたと言われます。日本はとても美しかったと。また、イザベラバードが東北を旅した紀行文には、世界で最も美しい農村風景が紹介されています。昭和の初めに来日したアインシュタインは、日本各地の美しさに驚き、地球上にまだこのような国があったことに対して神に感謝すると云いました。

教育の危機が叫ばれ、さらなる知識の習得が大切だ、体験が大切だなど様々な論議がなされているが、我が国では、地方も含めもっとも大切なことを忘れてしています。それは、「背中で教える」という教育です。家庭では親の地域では人々の、さらにはまちでは自治体の、歩むべき背中「姿勢」をきちんと示しているのでしょうか。まちの歴史文化の尊重、誇り、さらには歩むべき道筋等、所謂アイデンティティーを示し伝えているその象徴が、個性豊かで自然と調和した美しい町並み群なのです。このまち自身の背中(姿勢)を子供達に見せなくて、地域を担いたいとする次世代が育つのでしょうか! 誰かに提供してもらおう職があるから帰るのではないのです。誇りあるまちだからこそ自身で切り開いてでも故郷で暮らしを紡いでいくのだという、帰巢本能が働くようなまちづくりこそが大切で、その根本かつ基盤となる取り組みが、地域の歴史文化を踏まえた町並み・家並みの再構築です。

住の地産地建は地域雇用の確保、温暖化防止、豊かな森の育成などはもちろんですが、まちの矜持や次世代の教育にも繋がる最重要な取り組みであることを当地域でも再認識すべきです。